
かごめ唄

西城愁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かごめ唄

【コード】

N1630H

【作者名】

西城愁

【あらすじ】

『かごめ唄』はわたしとあの子たちを繋ぐ歌。だから邪魔しないでよ？(再編集しましたm)——(m)

かごめ、かごめ
籠の中の鳥は
いついつ出やる？
夜明けの晩に
鶴と亀がつうべつた
後ろの正面だあれ？

『遊ぼう千里ちゃん』
『一緒にかごめかごめしよう？』
『また仲良くしようよ』
『ねえ千里ちゃん』
『聞こえているんでしょう？』
『なんでお話してくれないの？』
『……まさか、忘れちゃったの？』

しやがみこむわたしを取り囲むように立つ、7人の子どもたち。白い着物に、白い帯。女の子の着物にはやはり白の糸で、華の刺繍が施されている。白い花を髪に差して、わたしに微笑みかける。男の子も同じ仕立てのものだけど、比べると動きやすい作りになっているのは確かだった。

この子たちのほかにひとはいない。わたしとこの子たちだけ。それ以外には、底の見えない闇が広がっていた。このままいたらわたし

達ちも呑み込まれてしまわれそうな、そんな錯覚に襲われてしまふような感じの深い闇。

他のひとを探そうなんて思わなかった。

だって、わたしは知っているもの。お父様やお母様、お手伝いの桐家さんがどこにいるか。今日の法事で来ていた従兄弟、その奥さんはどこがどこでわたしを待っているか。

わざわざ尋ねなくてもわかる。

最期に、ちゃんとお別れしたから。

「じゃあね」

また会える時まで、永久に。

人間なんて、かんたんに死んでしまうのよ。台所にある包丁ひとつ、カッター、ハサミでも。とにかく切り刻みさえ出来ればいい。それを首や、手首や、胸に突き刺せばおわりよ。呆気ないものなんだから。

真っ赤な血がどんどん溢れてきて、周りを染め上げる。この世界で一番綺麗な色よ。それにとても美味しいの。一度飲んだら忘れられない、甘い蜜の味。その味を知ったら、きつと欲しくてたまらなくなってしまう。

女の子が急に笑いを止めた。男の子が表情の無い顔でわたしを見下ろす。

虚ろな闇に、生暖かい風が吹いた。

『わたしたちのことなんて、みんなわかってくれるはずがない』

『都合の悪いことは忘れてしまふのが一番だから』

『そして人間は、自分の欲望のままに生きてきた』

わたしはこの渴きを潤すためだったらどんなことでもするわ。躊躇いすら感じない。人間は皆そんなものでしょう？ 自分の欲望のた

めならなんでもする。それが当たり前。
でも、そんなわたしをみんなは気味悪がった。悪魔の子どもとさげすんだ。

わたしが「普通」ではないんですって。可笑しいわよね。いったい誰と比べて「普通」なんていうのかしら？

他人にはできないことが、わたしにはできた。はるか彼方を見通すことや触れずに物を動かすこと、その気になれば他人の意思を操ることだってできた。

わたしは幼い頃から座敷牢に閉じ込められていた。訪ねてくる友達なんかいなかったわ。「普通」じゃないわたしにそんなものはなかったもの。でもわたしは寂しくなかなかった。わたしの周りにはいつも、この子たちがいたから。

わたしは部屋の隅っこで、毎日時を数えていた。ここを出るための計画を何度も練った。この子たちはいつでもわたしを手伝ってくれた。

『千里ちゃん』

『ぼくたちは千里ちゃんの味方だよ？』

『さあ、みんなが待ってる』

そうね、みんな。

独りで逝くのはイヤだものね？ 寂しいもの。あなたたちが生け贄となつて独りで死んでいったように、悲しくて恨めしい。

だからわたしが、みんな一緒に殺してあげたの。みんなとなら、怖くないでしょう？

恐怖に歪んだ顔。みんな、狂ったように床を這いずって逃げていく。楽しい遊戯ゲームの始まりよ。鬼ごっここの鬼はわたし。あなたたちは逃げ惑えばいい。生き残れるはずがないわ。捕まったら最後、わたしが殺してあげるもの。

「皆様ごきげんよう」

わたしが姿を現すと、皆驚いて喜びを隠しきれなかった。

「どうしてあの部屋から出られたんだ!？」

「お父様! 会いたかったわ」

わたしの伸ばした手はかんたんにはねのけられた。何がいけなかったのかしら。せつかく下女の血を塗りたくった包丁が床に転がった。

「煩い化け物が! お前なんかわたしの子ではない!」

「……嬉しくないの?」

じゃあ、楽しんでね?

わたしは嗤っていた。血に濡れた包丁を片手に、彼らを追い詰める人間は無力よ。本当は脆弱でか弱いくせに、強いつもりでいる。とても愚かな生き物。だからわたしが殺してあげるの。嬉しいでしょう?」

今日はお祖父様の七回忌。唯一、親戚が集まる日。

そして、わたしたちの願いが叶った日。

お父様は心臓をひと突き。心臓のご病気だったから、まるごと抉りだしてあげたわ。これでお薬は必要ないわよね。お父様はとっても喜んで、わたしの頬を撫でながら倒れた。何か言いたかったみたいだけど、お礼なんて必要ないのよ? ほかの臓器も引きずりだしてあげたら、お父様は動かなくなった。

お母様はアキレス腱を切ってから、首の頸動脈を切った。お母様は肌が白かったから、赤い血はお化粧にぴったりだったのよ。絶望に歪んだ顔に、とびっきりの死に化粧をしてあげた。口紅は真っ赤なお母様の血を引いて。お着物も赤に染めてあげたわ。お母様は女性だもの。お洒落にも気をつけないといけないでしょう? 着飾った

お母様は、とても美しかったわ。

桐家さんは、お父様とお母様を見てショックで心臓発作を起こして死んじゃったみたい。お年を召していらしたから、刺激が強すぎたのね。苦しむことなくちゃんと殺してあげようと思ってたのに。それは計算外だったけど、可哀相だから両目を抉ってあげたの。たくさん血が出て、噴水みたいに綺麗だったわ。

従兄弟たちも殺したわ。ご家族揃ってメッタ刺し。仲のいい家族だったのね、みんなが誰かを庇って死んだ。あつちでも離ればなれにならないように、みんな折り重ねて殺してあげた。おかげでお部屋がひとつの真つ赤な箱みたいになったの。あれはひとつの芸術作品になるわよ。

もっともつとたくさん殺したんだけど……。よく覚えてないわ。みんな同じような命乞いばかりするんだから。

「最後の一人だけ残してあげる」って言ったら、今度はみんなで殺し合うの。あれは楽しかったわ。みんな眼をギラギラさせて相手に襲いかかって。

最後の一人は残してあげたわよ、ちゃんと。

みんなを殺した部屋の真ん中に鎖でつないで、アキレス腱を切つて鍵もかけたの。ずっとそこにいて、みんなの顔が見られるのよ？

卑しい考えを持たない、とっても静かで綺麗な顔。これ以上の幸せはないでしょう？

ここはわたしの舞踏会。観客は酔いしれ、断末魔の音楽を奏でる。

そう、わたしだけのためにね。

とっても楽しかったわ。わたしを殺そうとした連中を殺してやるのは！

「みーんな、わたしが殺したの？」

わたしは皆に訊いてみた。皆も楽しそうに笑っていたわ。

『そつだよ』

『千里ちゃんが、殺したの』

『殺さないでつて騒ぐひとたちみんな!』

『千里ちゃんを苦しめるひとはみんな!』

わたしも嗤った。血塗れのまま、もう使い物にならない包丁を握り締めて。

「みんな、かんたんに死んじゃった! わたしが殺しちゃった!」

綺麗、きれい、キレイ。

朱の海が足下に広がっていく。わたしの世界を染め上げる。

その中心で、わたしたちはかごめかごめをするの。無邪気な子どものように、はしゃぎながら。

本当の生け贄は、わたしだった。一族が長らえるため、今日わたしは殺されるはずだったの。でもわたしを殺そうとした連中はもういない。わたしは自由になったのよ!

ご存知かしら? あの唄は真正正銘、呪い唄なのよ。生け贄を選ぶための唄だったんだもの。わたしは選ばれた子だった。この子たちもそう。皆のために死んでいった、憐れな子たち。

分らないはずの後ろの正面を当てたら、その子は神の子として特別に扱われる。偶然でもなかなか当たらないのよ。当てられたら、その子は相当の力を持っているとみなされた。生け贄にはふさわしい、神に気に入られる素質を持った子だもの。普通でないに決まっ

ている。
だから……、気を付けなさい？
当ててはダメよ？

*

「何かわかったか？」
「ダメです。さつきからずっとこんな感じで、僕たちの声が聞こえてないみたいなんですよ」
「親族の殺害は認めているみたいなんですが、7人の子どももなんかどこにもいませんし……」
「こんな可愛い子が人殺しだなんて信じられませんよ」

かごめ、かごめ
籠の中の鳥は
いついつ出やる？
夜明けの晩に
鶴と亀がつうべった

後ろの正面だあれ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1630h/>

かごめ唄

2010年12月22日14時45分発行